

# Concordia Wave

～対話の揺らぎを手がかりに、判断の自由をそっと守る～

思索駆動コース 山下真凜

## 記録の外で起きること

情報セキュリティは、形式化されたデータを守ることは強い。しかし対話の中には、記録されにくい揺らぎが存在する。

本音を飲み込む沈黙、理解のすれ違い、「はい」と言ってしまう直前の迷い。これらは守られないままに対話が進行してしまう。だからこの空白を見つめる必要がある。

私は歯学部にて在学し、臨床実習を通して医療現場の対話に触れる機会があった。医療では「理解した／同意した」の確認が難しく、沈黙や迷いが見過ごされやすい。だからこそ、記録の外にある揺らぎを扱う必要がある。

## 対話の「今」を守りたい

従来の対話支援は、議事録や録音など「後から振り返る」仕組みに偏りがちである。しかし私は、対話の価値が生まれる瞬間—すなわち対話の「今」を守ることに重きを置きたい。

判断の自由が支えられることで本音生まれ、対話情報の質が上がる。質の高い情報が生まれてようやく「守る価値」が立ち上がる。

そのとき、セキュリティはじめて意味を持つ。

あのとき感じた、名付けられない違和感の正体に、もう一度触れるために。

内容には踏み込まない。それでも、言葉が生まれる直前を守ろうとする。

Concordia Waveは、対話の関係に生じる変化を波として可視化する。発話量、沈黙時間、話者交替のリズムを手がかりに、静寂／調和／一方的／沈黙の4つの状態を推定し、振幅と色の変化としてリアルタイムに映し出す。

もしこの揺れを、言葉に触れずに捉えられるなら…

言葉は交わされている。手続きも整っている。けれど、その場の空気だけが、わずかにずれている。

対話は、発話の足し算ではない。互いの反応で形を変え、重なり、ときに静かに崩れていく。

それでも、何かが噛み合っていない。

診療室の椅子に腰かけた患者は、小さくうなずきながら説明を聞いていた。質問はないという。同意書にも、迷いのない文字で名前が書かれている。

2029年、夏。いくたびの留年の危機を乗り越え、私は歯学部生活の最後の一年を迎えていた。クリーニングから返ってきたばかりの白衣に袖を通し、大病院のエスカレーターをゆっくりと上がる。今日も同じ一日が始まるはずだった。

波

## それでも残る問い

展望として、私は次の2点に関心がある。

### (1) 医療者と技術者の橋渡し

医療機関へのサイバー攻撃は後を絶たない。「なんか分らんけどやばいかも」という現場の叫びから連絡が始まるが、その“叫び”の解像度を上げて共有可能な情報へ整流する対話支援が医療のレジリエンス向上に寄与するかもしれない。

### (2) 医療DXと責任の透明化

医療DXは利便性の一方で、データの流れや責任の所在が見えにくくなる。仕組みの理解を伴わないまま「プライバシーを守ります」と宣言する行為に医療従事者は真に責任を持てるのだろうか。

## 結び

対話の揺らぎを波として可視化し、必要に応じて介入（通知・設定）できる仕組みを試作した。ただし介入が直ちに対話を改善するかは未検証であり、この不確かさ自体が対話の難しさと課題の大きさを示している。

大切なのは、対話を「守る」とはということなのかを、機能ではなく仕組みとして捉えることである。個人の善意や現場の頑張りに頼らず、安心して本音が生まれる条件を、設計として支えたい。

今回はWebアプリケーションとして実装したが、対話の安全性を支えるには、より低いレイヤから「守れる構造」そのものを考える必要がある。対話の揺らぎに寄り添いながら、判断の自由を支える技術のあり方を、今後も探究したい。